



「中村光雄コレクション展 一独楽のある旅—」より

TOMO no KAI NEWS

Toyohashi City Art Museum

FU 風 伯 HAKU

展覧会紹介

中村光雄コレクション展 一独楽のある旅一

2/12(日)まで

●美術博物館 常設展示室 2
9:00～17:00 月曜休館

このコレクションは、かつて豊橋市中央図書館の要職にも就いていた中村光雄氏が、若い頃からの趣味であった旅行の途次、蒐集されたコマの数々を豊橋市に寄贈されたものです。

日本全国、各地域の風土や文化との出会いを求めての道すがら、ふと目にとまったコマの素朴な姿に、そこに住む人たちの遊びごころを感じとり、色や形の美しさに惹かれて以来、氏の旅は手づくりのぬくもりを求めてコマを探して歩くものへと目的を変えていったようです。北海道から沖縄まで日本全国、海外にまで足をのばして集められた千点に及ぶコレクションは、そのまま文化史の一面を表していると思われます。ひとつひとつのコマのもつ表情はとて豊かで、見る人のこころへ様々に訴えかけてきます。氏の各地の文化や風土への限らない愛着と深い造詣を、こうしたコマから感じとっていただけたら幸いです。この機会をお見逃しのないようご来館ください。



インドのひねりコマ



チェコの糸引きコマ

東海道五十三次宿場展Ⅱ

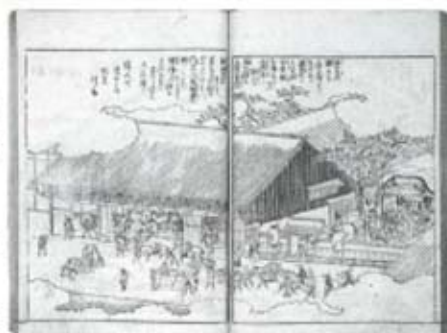
～関・坂下・土山・水口～

2/18(土)～3/26(日)

●二川宿本陣資料館 ●月曜休館
9:30～17:00(入館は16:30まで)

東海道は江戸と京・大坂をむすぶ街道として幕府から最も重視された街道であり、また、参勤交代の大名・朝鮮通信使・御茶壺道中・商人・お伊勢参りの庶民など多くの旅人が行き交う五街道中最も交通量の多い街道でもありました。道中の宿場は旅人で賑わい、地域の経済・文化の中心として栄えました。

この展覧会は、東海道五十三次の宿場を、江戸日本橋より京三条大橋まで順次紹介していく企画展で、本年度はその第13回目として、伊勢国(三重県)の関・坂下、そして箱根峠と並び称せられる東海道の難所鈴鹿峠を越えて近江国(滋賀県)に入り土山・水口の計4



東海道名所図会(坂下宿大竹本陣)
二川宿本陣資料館蔵

宿を取り上げ、歌川広重らの絵師が描いた各種の浮世絵、街道や宿場の様子を描いた絵図や絵巻物、名所図会、古文書等により当時の宿場や人々の暮らし、往來の旅人の姿を紹介します。

講座「江戸時代の旅」

会期中、様々な人や物が通行するメインストリートであった東海道や近隣の諸街道、また江戸時代の旅に関するお話を聞く講座が開催されます。

- 2/25(土)「宿場の形態とその変遷-関宿・坂下宿-」佐々木裕子氏(亀山市歴史博物館学芸員)
3/4(土)「美濃路-起宿を歩き交う人々-」神田年浩氏(一宮市尾西歴史民俗資料館学芸員)
3/11(土)「東海道水口宿の歩みと暮らし」米田実氏(甲賀市総務課市史編集係)
3/18(土)「無人島漂流記-アホウドリの島で過ごした21年-」名波寿氏(新居宿史跡案内人)

●いずれも午後2時より(1時間半程度) ●参加費=無料(ただし初参加時のみ入館料が必要)
●定員=50名 ●申込み=2/7(火)から電話で二川宿本陣資料館(41-8580)へ(先着順)

友の会創立20周年に寄せて

豊橋市長 早川 勝



友の会の創立20周年をお祝いいたしますとともに美術博物館に対する日頃の温かいご支援とご協力に38万市民を代表して感謝を申し上げます。

10周年から20周年を迎えるこの10年間の美博の新しい活動を私なりにまとめてみますと、一つには、中核市移行記念、開館20周年記念事業として、「トリエンナーレ豊橋」がはじまったことです。この事業は「星野眞吾賞展－明日の日本画を求めて－」として全国公募で新進作家の発掘と奨励を目的にこれまで3回行われて成果をあげています。故星野眞吾、高畑郁子ご夫妻の芸術に対する情熱にあらためて敬意を表します。二つには、世界の人形、郷土玩具・民俗工芸品等11,000点余の大口信夫コレクションに日本の郷土玩具2,000点余の小嶋寿女コレクションの寄贈が加わり、収蔵内容が一段と充実したことです。図録をご覧ください。三つには、友好都市のアメリカトリード市の美術館との間で「姉妹都市交流展」が開催できたことです。トリード市からは現代アーティストの作品、豊橋からは「東洋的作品」が送られ、トリード美術館の開会式には友の会の皆さんに出席をしていただきました。四つには、学芸員のギャラリートークが定着し、ボランティアガイドがつくられたことです。市民のなかに浸透し、好評を得ているのは喜ばしいかぎり、毎週1～2回行われるように期待します。なお、美博が一年間に購入した作品を次年度早々に展示するのは市民への情報開示の時代に即した対応といえるでしょう（美博の収蔵品数は美術1,000点、歴史36,000点、陶磁器1,000点、民俗3,500点、玩具15,000点、その他に考古資料コンテナ4,000箱）。

いま私が心魅かれているのは、人間の生活、風俗、習慣、歴史等の描かれた絵画です。人の顔、浮世絵もそうですが、それよりも人の動き、生活の息吹き、人の話し声、歌声、まちの騒音が聞こえてきそうな画です。特別展や本屋で購入した北京漫画、絵事典の人物編、華山の一掃百態図、舟木本の洛中洛外図、ピカソの156連作銅版画、ミラノで出版されたブリューゲルの解説本（イタリア語がわからず残念）をみて勝手に想像しています。何を考え、語り合い、どんな声音でときに笑い、怒り、悲しみ、口論していたんだろうか。作者は何を画いて、何を知らせ、訴え、風刺しようとしたのか、等々です。社会性があり、政治性があり、人間の心理、本能もあらわされているようです。

ところで、美博で「おかげまいりとええじゃないか展」がありました。どんな囃子、手拍子、鉦、太鼓で踊ったんだろうかと想ってみました。「ええじゃないか」の幕末の民衆運動の発祥地だけに興味があります。自称、漫画家の武田秀雄氏が「ええじゃないか踊り」を画いてくれました。見ていると自然に手足が動きたくくなるような面白い、楽しい踊りの輪です。

10周年記念の「風伯」で書いたパートⅡを憶い出しました。モンマルトルの丘で長野県出身の画家から「修業に来ているから」といわれて買った絵、ミレーの家の親父さんにすすめられたフランスの女流画家の絵が家にありました。20年前、10年前のものですが、彼氏は日本で活躍しているのか、まだパリで勉強中なのか？彼女は名を成しているか？と楽しい夢をみさせてくれます（市内にも月1回絵描きさんの集まる公園があればね）。

ところで、友の会の企画に海外の美術館巡りがあると聞きます。いつの日かブリューゲル作品鑑賞の旅があると参加したいです。農民の生活を描き、中世の文明・宗教社会を批判しているといわれる画家をたずねる旅です。「バベルの塔」、「子供の遊戯」、「雪中の狩人」、「農民の結婚式」等々のあるウィーン的美術史美術館からはじまってナポリ国立美術館で「盲人の寓話」、ブラド美術館で「死の勝利」をみて、そして、ベルギーの中世の街ブルージュを再訪したいのです。本当にいつの日にかです。

吉田城 御城内鎮守・天王宮と神明宮



吉田藩土屋敷図(部分) 豊橋市美術博物館蔵

江戸時代の吉田城城郭平面図を見ると、二つの神社が今に残されていることが分かります。西の天王宮(吉田神社)と、東の神明宮(安久美神戸神明社)です。共に30石の御朱印が与えられており、繁栄を競っていました。

天王宮 (吉田神社)

大宝2年(702)10月、持統天皇が三河に行幸された時建てられた行宮の一つが、この天王宮の始まりという説、又、京都、八坂神社の、「牛頭天王(ござてんのう)」信仰によって造営された社という説などもありますが、創建の経緯ははっきりと記録に残されていません。この神社の神事は、「花火の奉納」と、「神輿渡御」です。特に手筒花火は、永禄3年(1560)、今川義元の寄進によって始まったと言われ、この神社が発祥の地と言われています。



三河国吉田名蹟録 和田元孝氏蔵

江戸時代、城内のこの神社への参詣は許されておらず、城外の「素盞鳴神社(わくぐりじんじゃ)」に渡御されて、ここで一般市民の参拝がなされました。この渡御行列は、「頼朝行列」と呼ばれ、笹踊り・天狗・騎馬の頼朝・乳母・侍10騎・厄除けの饅頭配り…と続きます。

天王宮に伝わる「鼻高面」の由来は明らかではありません。子供がこれを付けて、社殿に向かって後退りに歩く、という神事が明治頃まで行われていましたが、今では絶えてしまい行列の中の天狗がこの面を付けています。



鼻高面

神明宮 (安久美神戸神明社)

天慶3年(940)、時の朱雀天皇は、平将門の乱平定の報賽として、飽海郷10戸を伊勢神宮に寄進、この時伊勢神宮より神宮司が派遣され、この神明宮が啓(ひら)かれました。この神社に伝えられている「鬼祭り神事」は、平安、室町時代の田楽の一種と言われており、設立当初はその年の農作物の豊穰を祈ることでしたが、その後色々な神事が加えられ、「厄除け神事」、「年占神事」へと発展し、広く親しまれるようになって行きました。

神前広場の神事が終わると、神輿に神霊を奉還し宮司以下行列を整えて、談合神社へ神幸します。行列は、黒鬼・神楽殿・天狗・御玉・子鬼・御頭・宮司・神輿・欄宣・青鬼・太鼓…と続きます。談合神社で祭典を行った後、年占の榎玉を献上して、再び行列を整えて還行となります。



神楽之図(部分)



天狗面

赤鬼面

「鬼祭り」の赤鬼及び天狗の面は、今川義元より寄進されたというものが使用されて来ましたが、昭和15年(1940)、皇紀2600年、神明宮1000年祭に新しく寄進され、現在ではそれが使用されています。 坂口正治(1188)

富弘美術館と 軽井沢



軽井沢大賀ホール見学風景



メルシャン軽井沢美術館のモニュメント

今回の「友の会」秋の研修旅行の目的のひとつは、新しい豊橋市美術博物館の建設に向けての様々な問題の一端を考える参考になれば、ということだったようです。お陰で私にとってはいつもの「楽しい旅」と言うだけでなく、あれこれと考えさせられた有意義な二日間でした。

国際コンペで設計された新・富弘美術館は群馬県東村という渡瀬渓谷を堰き止めた草木ダム湖沿いにあります。景観のとても素晴らしいところです。バスの中で、途中から乗車された群馬県の建設課の椎名氏からいろいろこの館の建設に係わる詳細なレクチュアを受け、裏話など興味深い話などもお聞きしたりで、嫌が応にも「一体どんな素敵なおとこだろう」と期待感が昂まらざるを得ませんでした。ところが、バスが着いた途端「あれ？ここは何処なの」と一瞬目を疑いました。

そこは、あまりにも俗っぽい、猥雑な土産物屋さんの前だったのです。なんだか期待感がすうっとしぼんでゆくようでした。アプローチは夢の入り口なのです!!でも、さすがに美術館自体は優しい雰囲気にも包まれたほっとするものでした。中の展示も心配りの利いた、落ち着けるものでしたし、作品はもちろん、しみじみとした優しさにあふれた、心に響くものでした。欲を言えば、もっと人のいない、閑かな時にゆっくりと円い部屋部屋を巡ってみたいものと思いました。

ボランティアとおぼしき人々が、駐車場や館内の案内をしてみえましたが、先程のお土産屋さんも、地元のボランティア活動の一環と聞き、なかなか難しいものと痛感しました。

次の日、ひんやりとした霧の流れる軽井沢プリンスホテルの朝は、心地よく紅葉も見事で、その余韻を残して「軽井沢大賀ホール」に立ち寄りしました。何という素晴らしさ！もう言葉では表現出来ないくらい深い感動にとらわれてしまいました。立地の素晴らしさはもとより、ホールの佇まい、中に入った途端「ほわ〜」とした温もりのある木の香り、目に優しい光に穏やかに包まれる幸福感、そして此処にもう、既に美しい音楽が奏でられているかのような錯覚を起こさせる、空間の見事さ、思わず溜息が出でしまいました。いつか是非とも此処で好きなバロック音楽の演奏に酔ってみたいものです。

最後のメルシャン軽井沢美術館見学は、ミロの創造力豊かな、眩惑的作品との対峙となりました。17年ものの芳醇なウイスキーの試飲と、4種類のワインの飲み比べというおまけ付きで、一層眩惑されたのかも…

浅間山、白樺、葛紅葉、さわさわと風渡る高原の夢心地の二日でした。ひとときの幸を同行の友としみじみ語り合い、このような旅を企画し、お世話して下さった方々に感謝するとともに、バスの中でのビデオ鑑賞も、興味深いものを選んでいただき、さすがは「友の会」と嬉しく思っています。

河邊 満江 (699)



ブテイミユゼ パリの小美術館の魅力 — 彫刻家の魂を見る

豊橋市美術博物館館長 金原 宏行

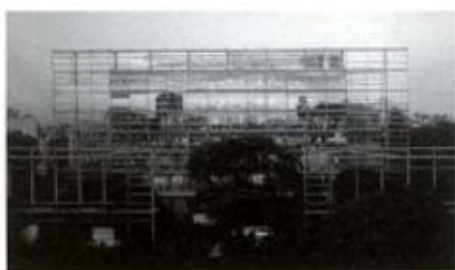
今夏、ロンドンとパリの美術館を巡る機会があった。ロンドンから特急ユーロスターに乗る。この列車が、丁度ロンドンのテロ事件の後で、出国検査に時間がかかり、30分遅れた。ドーバー海峡を潜るとすぐフランスに入る。イギリスはEUに加盟しているものの、通貨はまだポンドである。独仏に経済的に呑み込まれることを危惧したためらしい。



ブルデル美術館

ブル公園側のパリ市立ザッキン美術館とそれぞれ異なった趣きが作家の魂の在りかを示して面白い。ロダン、ブルデル、マイヨール…と近代彫刻の系譜を知ると、彼らの彫刻から、その心とパワーを知ることが出来、制作された母子像のオーラによって西洋人は救われたとも思えてくる。

ギメ美術館は、旧来のビルを改装して、面目を一新している。実業家ギメが1885年に始めたもので、東洋美術の殿堂としてフランス東洋学の厚みを感じさせる。敦煌の守護神といわれた常書鴻もここで敦煌絹画を見て、民族芸術に目覚めたのである。法隆寺の金銅菩薩立像を並べた別棟や茶室もいい。改装なったマルモッタン美術館からも隣接している。印象派の作品で



カルティエ現代美術館

名高い瀟洒なこの貴族の館から20年前、モネの《印象一日の出》などが盗難に遭い、世界の耳をそばだたしめたが、無

事返還されて、現在は多くの愛好家が集う。館を出てモンバルナス街道を進むと、ロダンの《バルザック像》(寝間着姿と俗称される)がすくっと立っている。こうした風景が、やはりパリなのだと思う。

セーヌ川沿いのカルティエ現代美術館は、新しい現代美術の展示場で、15のブースに村上隆と三宅一生の名前があった。ミヤケは、ファッション界にヨーロッパ風の肉体を引き立てるやり方ではなくて、ボディラインを消す、包み込むデザインで新風を巻き起こした。柔らかな木漏れ日を浴びての帰路、モンバルナス墓地を横切ると、木村忠太の御影石の墓やプランクシーの石造の《接吻》に出会う。後者は、亡くなった愛好者が自らの墓標としたものである。ボンビドゥーセンター(パリ国立近代美術館)では、戦前戦後のパリ画壇の動きが手に取るように理解出来る。伝統と絶えずそれを越えようとするものの



ギメ美術館

歴史である。ルーブル美術館のリニューアルされたエジプト翼(ウイング)は、発掘品を見やすくする工夫があり、次代を担う子供たちにも配慮している。世界をリードするルーブルは、分館を作るという垂れ幕を入口に掲示していた。こうした試みから、美術館こそ社会の産物であるから変わらなければならない、そんなことを示唆するメッセージのように見えた。小美術館のパワーが感動の渦をつくり出している。今回の旅は、それら渦がより大きく感じられた。

友から友へ Members to Members

不思議な縁

森 猛 (727)



ここ美術博物館の場所に昔、動物園のあったことを知る人は少なくないと思います。私にとってこの美術館の周りを歩くととても懐かしく思い出される人がいます。山下清。裸の大将として知られていますが、その本人にちょうど美術館のあたりの建物の2階で行われていた「山下清展」で当時母親に連れられた私は出会いました。子ども心にその頃にできたばかりの作品の色はととても鮮やかで、細かい絵の仕上がりに驚き、感心しました。のほほんとした気のいいおじさんの偉大さを知らない私は「すごく細かくて大変だね、でもとってもきれいだよ」と話しかけました。「いやあ、絵は楽しいよ。もっとやりたい」とはにかみながら無邪気に答えてくれました。その会場には山下兄弟と我々親子の4人だけでした。しばらく絵のことや彼自身の

ことなどいろいろな話をしました。そして絵はがきにサインペンで山下清としっかりした字でサインしてもらいました。

中学生になって美術の先生とその話題になり、「その絵はがきを見せてくれ」といわれ探しましたが、その価値を知るはずもない私には幻のお宝になりました。

ここへ来るといつもそのことを思い出します。それが美術というものに関心を持つきっかけになりました。テレビで見る「山下清」は私の心にある彼とは少し違います。いつも違和感を感じながらも懐かしく思います。

38万人の都市になった豊橋市も100年の節目を迎えます。市電の町として親しまれていますか「どんな町？」聞かれても田原市とは違い、これといった有名な人物がいるわけでもなく、有名なお稲荷さんがあるわけでもなく説明に困ります。どこかのように「文化不毛の地」などとは呼ばれないように将来予定される新しい美術博物館が人々の憩いの場所であり、豊橋のランドマークのひとつになるように期待します。

心の中からドラマが・・・ 山崎 恵子 (760)



ものを本当に見ていなかった様な気がする。

絵を描き始めて、それをよりいっそう思うようになった。凝視して見ると、自然界のものは、デザインもステキだし色も斬新だったり、なんといっても機能がはっきりしている。

自然のきびしさを把握して無駄をそぎ落とした美。人工的なものは、偉大なる自然から学ぶことが多い。

抽象画を描きはじめる。私のテーマは自然と人工的

な物との融合を、いちばん単純な形である点・線・丸・角などで表現する・・・これである。

私の内面のどこかに存在する、あるイメージを具体化する作業こそが、絵を描くということなのだ。

クレーが言う「現実の世界が苛酷になればなるほど、絵画は抽象的になる」と。

たびたび作品の製作に行きづまり、手が動かなくなる。ある時、ふっと手が動き出す。そうしたらしめたもの。速い速い筆がすべる。墨が飛ぶ。

墨の無限な色彩、和紙のさまざまな現象に助けられて私の作品が生まれる。

小さなドラマが・・・。

心に残る美術館

社 本 善 幸 (968)



初めて訪れた美術館は記憶にありませんが、たぶん上野の西洋美術館だったと思います。当時私は美術には興味がなく、おおかたの少年と同様、考古学や地質学に関心がありましたので、国立博物館や科学博物館に行ったついでに入館しました。

ロダンの彫刻群が印象に残っているような気がしますが、それは

その後何度も訪れているので偽の記憶かもしれません。

私が美術を志したのは細谷小学校を卒業するころです。その頃の細谷小は教頭が山口孝雄先生で私の担任は竹本富士夫先生。お二人共美術の先生でした。伊奈

彦定先生や市川晃先生もしばしばお見えになり、私はそれらの先生方に俄然興味を抱きました。それまで見知っていた大人たちとはまったく違っていったのです。失敬な言い方で恐縮ですが、それらの方々は恐竜の化石やエジプトのミイラよりも風変わりな魅力的に感じたのです。

美術館もたびたび行くようになりました。竹本先生に連れられ親愛知県美術館でのオディロン・ルドン展は、脳裏に鮮やかに残っています。

近頃、集客力が美術館を評価する基準になりつつあるのは、非常に気がかりです。美術館はアミューズメントパークとは違いたとえ月に一人きりの来場者でも、その人の心に何かが残れば、意義ある施設なのではないでしょうか。

収蔵品紹介

[トスカナの城]

森 清治郎 ●MORI Seijiro (1921-2004)

1961(昭和36)年 麻布、油彩
145.5cm×97.0cm

森清治郎氏は、平成16年10月30日に逝去されました。豊橋市美術博物館では、追悼の意を込めて平成17年2月12日まで、2階シンボル展示コーナーで〈トスカナの城〉など収蔵品を紹介しています。

豊橋中学校(現、時習館高等学校)を卒業した森清治郎は、上京して川端画学校で学んだのち、東京美術学校に入学するが、捻挫した左大腿部が関節炎に罹り、6年間休学することになる。

戦後、復学して寺内萬治郎に師事し、東京・下町の建造物を題材に、焼け残った古壁を主体に描いていく。重厚に描きこまれた白壁は、どっしりとした存在感をリアルに伝えている。物質感を強調するために、絵具を手で掴めるほどに固めて、筆を使わず塗り込むという独特な技法を用いた。

ユトリロや佐伯祐三に憧れ、昭和33年にマルセイユからパリに渡った森は、彼らの描いた街並みを歩いてスケッチするなど、ヨーロッパ各地を1年半にわたって取材した。

第47回光風会展に発表された〈トスカナの城〉は、その成果を代表する1点となり、執拗に重ねた絵具の痕跡が、歴史を刻んだ石のディテールとなって、迫真的な画面を形成する。

やがて、滅び行く日本の古き良きものを遺そうと奈良・大和路をはじめ、信州・東北など各地の風景を描き続け、「民家の画家」とさえ呼ばれるようになった。森が描き出す画面には、日本人に共通する〈原風景〉が内在し、人々の心に安らぎと郷愁を呼び起こす。

画家が生涯を通して、堅牢なマティエールと深い色彩によって希求したものは、「ゆるぎない存在感」であった。

(豊橋市美術博物館主任学芸員 大野俊治)

編集後記

- 通い慣れた葦毛湿原の木道も今朝は霜で真白、足跡を付けるのが勿体ない。その頃風伯の編集が終わりました。本号の初頭に掲載された市長の言葉、それは美術芸術についての高度な知識と理解が豊かな感性となって表現されています。更に私達会員に対する暖い助言と支援は本当に嬉しく、住んでよかった豊橋、入ってよかった友の会、との思いです。

研修旅行は金原館長の講義を始め多彩な秀景と収穫を得たようで期待以上の成果でした。

「吉田城御城内鎮守天王宮と神明宮」は郷土の人々と神社との関わり合いを歴史を通じ検証した興味深い記事で当時の領民の生活習慣や祭り事が現在の私達にどのように受け継がれて来たか、改めて考えさせられます。

今回の風伯編集方針は紙面の硬直化を排し多数会員の皆様から萌え出る発想や貴重な御意見等を集約して内容を充実すべく努力致しましたが力不足のため充分達成出来ませんでした。しかしながらこれからも一歩ずつ前に向い進んで参ります。会員の皆様の御意見、御感想を御待ちしています。

岡野 弘(3061)